

造形興味調査*

新井秀一郎・増田金吾・水野谷憲郎

美術

I. 結論

1. 調査の目的

児童の造形表現活動は1歳半から2歳ごろには早くも泥いじりやなぐりがきの形で始まり、その後形を変えながら発展して行くのであるが、少年期にさしかかる頃からその活動が鈍るように見える。

これを創造力の衰退と見て一般教育における造形表現活動の終りの時期とする考え方は現在一応否定されてはいるが、チゼック以来100年にわたる誤解の名残りは今日といえども完全に払拭されているわけではない。

事実、児童の表現活動を描画に限って観察すれば、彼らの活動はそのように見えないわけではないが、われわれはこれを、児童の造形表現活動への意欲の減少と見るのではなく、方向の変化と考え、幼児期から低学年時に主として描画に向かっていった興味が、一体どちらに方向転換して行くのか、その実態を明らかにしようとするものである。

おおよその予想としてはそれは主として工作的な活動へ移行することが、これまでの観察によって推定されていた。そうした傾向の確認とそれがさらに具体的な領域や、領域内の材料や技法とどのように結びついて表れるかを確かめてみたいというのがこの調査の目的である。

2. 調査の方法

(1) 予備調査

表1 調査対象

本学附属学校児童生徒

学年	男子	女子	計
小2	134名	141名	275名
4	142	133	275
6	122	132	254
中1	213	201	414
3	243	246	489
高1	95	78	173
2	54	61	115
計	903	892	1795

表2 調査結果 (単位 %)

	男	11	13	14	28	28	30	
								女
絵をかく	男	1	2	3	0	2	0	6
	女	3	1	1	3	3	3	12
版画を作る	男	5	7	3	7	11	13	4
	女	9	7	15	7	9	16	15
彫塑を作る	男	7	5	9	20	12	11	15
	女	11	15	14	36	17	18	22
平面デザインをする	男	44	47	60	49	30	45	38
	女	26	48	37	17	17	18	9
使うものを作る	男	0	0	0	0	1	1	1
	女	1	0	0	3	4	0	1
かいて遊ぶ	男	21	26	10	8	6	0	3
	女	9	6	2	2	4	2	0
作って遊ぶ	男	0	0	0	3	9	0	1
	女	0	0	0	1	2	3	1
鑑賞をする	男	0	0	0	3	9	0	1
	女	0	0	0	1	2	3	1
学	年	小2	小4	小6	中1	中3	高1	高2

*1982年6月10日受理

そのような実態を知るためには、児童の造形表現活動そのものを直接に観察し、かつ直接に児童の感想を聞きとるのがよいと思われるのであるが、実施上の困難と結果が不正確になることなどを考えて、結局平凡なアンケート方式によることとした。そうして昭和56年6月、本学附属学校を対象として予備調査を実施した。

その結果の詳細については紙数の関係で省略せざるを得ないが、おおよそ予想通りの傾向が見られた。

(2) 調査

予備調査の結果に検討を加え、さらに質問肢の選択等を訂正した後本調査を実施した。

調査に使った質問紙は2枚で、一方は低学年用であり、調査は、どの場合も指導者の指導のもとに行われた。

調査月日、1981年 月 日

調査月日、1981年 月 日

いま、あなたが一番やってみたいとおもうものを下の「あ」の中から一つだけえらんで下さい。「あ」の1～4をえらんだ人は「い」や「う」のらんも（4は「い」のらんだけ）一つずつえらんで下さい。

えらんだものにはその番号に○をつけて下さい。

現在、自分が一番やってみたいと思うものを下のA欄の中から一つだけ選んで下さい。A欄の1～4を選んだ人はB欄やC欄も（4はB欄のみ）それぞれ一つ選んで下さい。選んだものにはその番号や記号に○をつけて下さい。

学校 年 組 なまえ 男・女

学校 年 組 氏名 男・女

「あ」のらん	「い」のらん	「う」のらん
1. えをかく	1. そりぞりしてかく 2. シャセいをする	1. えんぴつなどでかく(素描) 2. 色をつかってかく
2. はながを作る	1. そりぞりして作る 2. シャセいをもとにして作る	1. 一色で作る 2. 二色いじょうの色をつかって作る
3. ちょうそ(ちょうこく)を作る	1. そりぞりして作る 2. シャセいをもとにして作る	1. ねんどで作る 2. 木や石を彫る
4. 工作をする	1. つかうものを作る 2. もけいやあそぶものなどを作る	
5. もようやぼすたあを作る(平面デザイン)		
6. ゆうめいなえやちょうこくを見る		

A 欄	B 欄	C 欄
1. 絵をかく	A. 想像してかく B. 写生をする	a. 素描をする b. 色彩を使ってかく
2. 版画を作る	A. 想像して作る B. 写生をもとにして作る	a. 単色で作る b. 多色(2色以上)で作る
3. 彫塑(彫刻)を作る	A. 想像して作る B. 写生をもとにして作る	a. 粘土で作る b. 木や石を彫る
4. 工作(工芸)をする	A. 使うものを作る B. 模型や遊ぶものなどを作る	
5. 平面デザインをする(ポスター・カレン・ゲームマークなどを作る)		
6. 鑑賞をする		

調査に協力していただいたのは次の各校であり、調査対象とした児童生徒数は表に示した。(回答のうち不備なものはすべて取り除き完全なもののみを対象として扱った。)

なお高校3年だけは調査数が少く(回答2校のみ)従って統計の結果についてもやや偏りがあるかと思われる。

小学校	練馬区立	田柄第三小学校	中央区立	泰明小学校
	葛飾区立	葛飾小学校	東村山市立	秋津東小学校
	世田谷区立	東大原小学校	新宿区立	四谷第七小学校
	青梅市立	霞台小学校	千代田区立	錦華小学校
	板橋区立	成増小学校		以上9校

中学校	大田区立	大森第七中学校
	立川市立	立川第一中学校
	新宿区立	落合第二中学校
	品川区立	戸越台中学校
	〃	荏原第一中学校
	東久留米市立	大門中学校 以上6校
高等学校	茨城県立	境高等学校
	〃	岩井高等学校
	〃	岩井西高等学校
	神奈川県立	寒川高等学校
	神奈川県立	藤沢北高等学校
	私立	玉川学園高等部
	東京都立	拝島高等学校
	〃	千歳高等学校 以上8校

表3 調査数

	性別		計	
	男	女		
小 学 校	1	375	378	753
	2	446	437	883
	3	432	410	842
	4	387	399	786
	5	428	372	800
	6	380	355	735
小計	全	2,448	2,351	4,799
中 学 校	1	464	397	861
	2	415	408	823
	3	310	262	572
小計	全	1,189	1,057	2,256
高 等 学 校	1	440	359	799
	2	391	382	773
	3	74	63	137
小計	全	905	804	1,709
		4,542	4,212	8,754

(新井)

II. 造形への興味の発達段階

1. 各領域ごとに見た発達の姿

以下に示す図は，Iの方法で調査したものを各領域ごとにまとめ，折れ線グラフで表わしたものである。この図をもとに各領域ごとに見た発達段階について述べる。それらは学年によって多少の差異はあるものの，興味の度合はおおむね工作（工芸），絵画，平面デザイン，彫塑，鑑賞，版画の順である（表4・表5・表6，図1）。

表4 小学校における各領域・各事項

素数単位：人

	1年		2年		3年		4年		5年		6年			
	総数	753	総数	883	総数	844	総数	786	総数	800	総数	735		
絵画	素数	%	素数	%	素数	%	素数	%	素数	%	素数	%		
B	想像	175	23	165	19	93	11	106	13	75	9	102	14	
	写生	162	22	116	13	90	11	66	8	75	9	72	10	
	C	素描	89	12	92	10	56	7	47	6	39	5	72	10
		色彩	255	34	198	22	123	15	118	15	107	13	99	13
版画	70	9	78	9	47	6	45	6	44	6	38	5		
B	想像	40	5	44	5	32	4	28	4	27	3	23	3	
	写生	28	4	31	4	14	2	17	2	16	2	15	2	
	C	単色	25	3	23	3	17	2	19	2	15	2	18	2
		多色	42	6	52	6	29	3	24	3	28	4	20	3
彫塑	85	11	140	16	126	15	101	13	77	10	107	15		
B	想像	47	6	77	9	76	9	69	9	47	6	76	10	
	写生	37	5	59	7	45	5	29	4	26	3	28	4	
	C	粘土	50	7	55	6	38	5	32	4	22	3	31	4
		木・石彫	33	4	79	9	84	10	67	9	51	6	74	10
工作	165	22	248	28	310	37	339	43	393	49	300	41		
使 う も の		43	6	52	6	79	9	92	12	119	15	122	17	
	模型・遊ぶもの	114	15	203	23	237	28	246	31	266	33	178	24	
平面デザイン	58	8	78	9	151	18	116	15	124	16	77	10		
鑑賞	19	3	44	5	24	3	11	1	1	1	37	5		
計	753	100	883	100	844	101	786	100	800	101	735	100		

表5 中学校における各領域・各事項

素数単位：人

		1年		2年		3年	
		総数	861	総数	823	総数	572
		素数	%	素数	%	素数	%
絵画		183	21	167	20	140	24
B	想像	70	8	66	8	57	10
	写生	111	13	101	12	82	14
C	素描	78	9	61	7	63	11
	色彩	106	12	95	12	73	13
版画		31	4	20	2	17	3
B	想像	15	2	11	1	8	1
	写生	16	2	8	1	9	2
C	単色	15	2	11	1	10	2
	多色	15	2	7	1	7	1
彫塑		100	12	100	12	58	10
B	想像	61	7	52	6	30	5
	写生	30	3	41	5	26	5
C	粘土	24	3	29	4	10	2
	木・石彫	72	8	62	8	47	8
工作		347	40	305	37	148	26
	使うもの	135	16	133	16	79	14
	模型・遊ぶもの	205	24	169	21	69	12
平面デザイン		147	17	173	21	103	18
	鑑賞	53	6	58	7	106	19
計		861	100	823	99	572	100

表6 高等学校における各領域・各事項

素数単位：人

		1年		2年		3年	
		総数	799	総数	773	総数	166
		素数	%	素数	%	素数	%
絵画		251	31	236	31	46	28
B	想像	94	12	86	11	11	7
	写生	150	19	142	18	35	21
C	素描	105	13	82	11	11	7
	色彩	141	18	148	19	35	21
版画		22	3	36	5	7	4
B	想像	10	1	13	2	1	1
	写生	11	1	23	3	6	4
C	単色	10	1	18	2	4	2
	多色	11	1	17	2	3	2
彫塑		71	9	74	10	13	8
B	想像	34	4	41	5	7	4
	写生	33	4	33	4	6	4
C	粘土	20	3	14	2	2	1
	木・石彫	51	6	59	8	11	7
工作		211	26	162	21	30	18
	使うもの	108	14	76	10	6	4
	模型・遊ぶもの	98	12	84	11	23	14
平面デザイン		139	17	116	15	31	19
	鑑賞	105	13	149	19	39	23
計		799	99	773	101	166	100

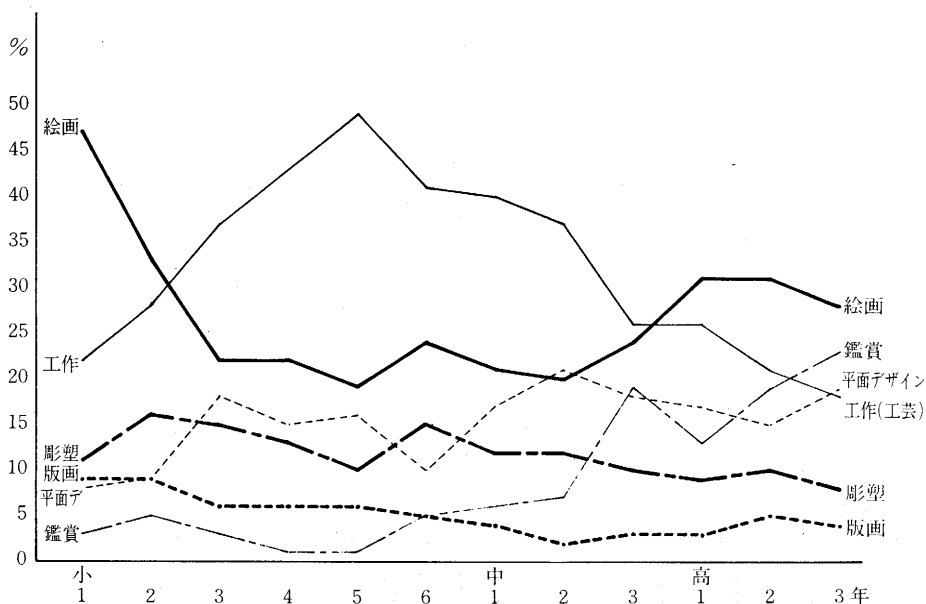


図1 全領域

(1) 絵画 (図1)

前述したように絵画に対する興味(意欲)の度合はかなり高い。小学校低学年と高等学校(以下, 高校と略称する)の段階では特に高い。一方, 小学校3年生(以下, 単に小3と略称する。中学校や高校の場合も同じ)から中2までの間が低いとはいえ, 約20%もの児童生徒はこの領域に興味を示している。グラフの全体としての形は高い位置でのほぼ「谷形」を示す。

小1の段階で50%に近い児童が絵画を選ぶのは, 幼児期における活発な描画活動のなごりとも言うべき現象であろう。次に小5での低下は, この時期に写實的傾向が出て来ることと関係があるのではないか。つまり写實的に表わそうとするが, 技術上の熟練の不足などの理由でそれが思うようにできないため描画を敬遠するようになると思われる。ところが, 小6で再び上昇する。これはより心象的な表現と言いうところの絵画と彫塑とが上昇し, より機能的な活動と解釈できる工作と平面デザインが低下することから判断する限りこの時期の情緒的発達と関係があると思われる。又, 中1から中2にかけての低下について考えると, このことは平面デザインの上昇にも見られるように, 生徒の合理主義的, 論理的傾向を示す事実を裏書しているかに見える。

(2) 版画 (図1)

今回の調査の限りでは, この領域に対する興味は非常に低い。あるいは領域の一つとして絵画と並列すべきではなかったのかも知れない。グラフでの形を見た場合, 絵画と似ていることから判断して, 本来版画を選ぶべき者も絵画を選んだ者の中に含まれているという可能性は考えられよう。

(3) 彫塑 (図1)

年齢が進むに従っての増減は少ないように見える。ただ興味ある点は, 小4から中2までは絵画のグラフと形がよく似ていることである。心象表現として同じような性質を示しているのではないだろうか。

(4) 工作 (工芸)(図1)

工作に対する興味は他領域に比べ非常に高い。特に, 小学校中学年から中学校中学年にかけては35%以上, 小5では50%に近い児童がこの領域に興味を示している。グラフの形は全体として高い「山形」を示す。

小5と言えはいわゆる「ギャング・エイジ」と呼ばれる時期である。この時期に, じっとして描く絵画よりも比較的体を動かして作る工作に興味・意欲が向けられるのは当然と言えよう。次に, 全体的に見れば高い位置にあるが小5に比べての小6での低下は, (1)で述べたように情緒的発達に関係が深いと思われる。又, 中3での急激な低下(これも全領域的に見れば決して低くはない)も, 絵画や鑑賞の上昇と合わせ考えた時, 情緒的傾向の強いこの時期の特色と関係があると言えるのではないだろうか。

(5) 平面デザイン (図1)

年齢が進むに従っての増減はあまりないように見える。ただ, 小6では低下し, 中1から中2にかけてはかなり上昇している。これらについては(1)で絵画と関連して述べたが, 中1から中2にかけての上昇については, (1)で述べたことに加えて知的発達が目立つのもこの頃であることを記しておく。

(6) 鑑賞 (図1)

この領域に対する興味の度合は低年齢では低いが、年齢が進むに連れてかなり高くなる。それにしても今回の調査では中3時に極端に高くなっているが、本来はもっとなだらかな上昇を示してもよいと思う(図2の点線)中3での美術科が週1時間の制限を受けていることが影響し、表現から遠ざかっていることがこの結果に結びついているのではないだろうか。

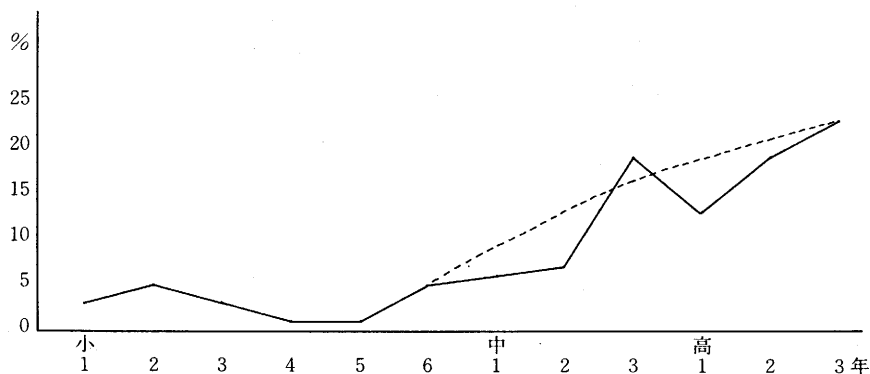


図2 鑑賞

2. 各領域における事項間の比較

以下に示す図は、Iの方法で調査したものを各領域における事項についてそれぞれまとめ、折れ線グラフで表わしたものである。この図をもとに造形への興味の発達段階の内、各領域内の各事項ごとに見た発達について述べる(表1・2・3)。

以下、領域ごとに事項間の比較考察を行なう。

(1) 絵画における想像と写生との比較(図3)

絵を描くことに興味(意欲)を示した児童生徒が、更にそれを「想像してかく」(以下、単に想像と略す)ことに興味を示すか、「写生をする」(以下、単に写生と略す)ことに興味を示すか調べた結果である。

小6までは、想像画に対する興味の方が写生よりも高いが、中1以降は逆となりその差は徐々に開いて行く。写生に対する興味は小5から徐々に高くなっている。小1で、写生と想像がほぼ同率になっていることは一般の常識と異なる結果を示しているようであるが、低学年児にあっては、写生の意味が十分に理解されていないこともこのことと関係があるように思われる。ただ小6で想像が写生をかなり上まわっていることには興味をひかれる。このことは、1の(1)で述べたように、この時期の情緒的な発達と関係があるものと思われる。なお、中3からの写生の再上昇は現実への関心の高まりを示すこの時期の特色と言えよう。

(2) 絵画における素描と色彩との比較(図4)。

(1)に続いて、「素描をする」(素描と略す)ことに興味を示すか、「色彩を使ってかく」(色彩と略す)ことに興味を示すかを調べた結果である。

全学年を通じて素描よりも色彩に対する興味の度合が高く、小学校低学年や高校段階において著しい。素描については、グラフの形が絵画全体の形とよく似ている。

小学校低学年で非常に多くの児童が色彩に興味を示すように見えるのは、彼らにとって絵とは色を伴うもの（固定的色彩様式）であるという単純な認識を示すものに過ぎないであろう。色彩が色彩としての意味をもつのはほぼ思春期以後と考えられる。

高1からの色彩の上昇と素描の低下は不安定な情緒の表われを示す事実を裏書しているように思われる。なお興味ある点はグラフによれば、小3から中3にかけては、発達による影響が色彩にはほとんど表われずほとんど素描にのみ表われるということである。

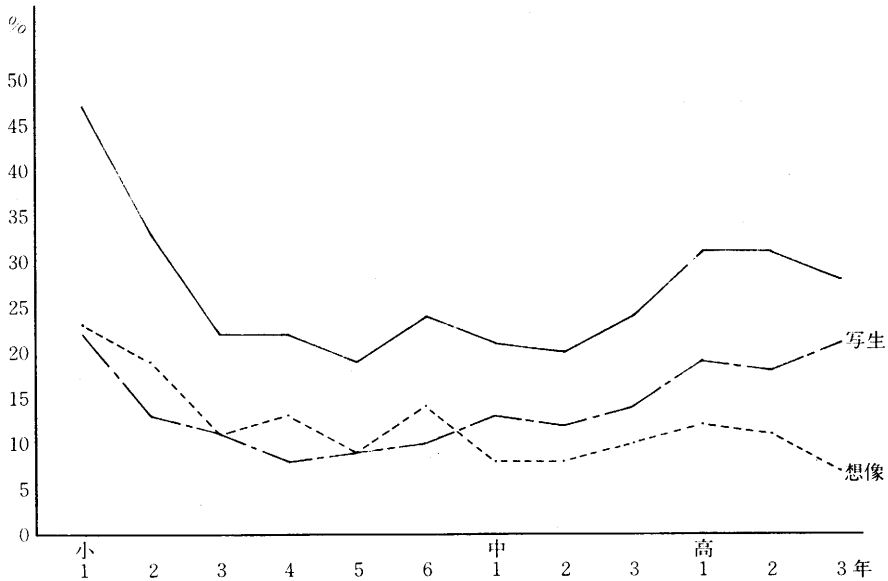


図3 絵画における想像と写生

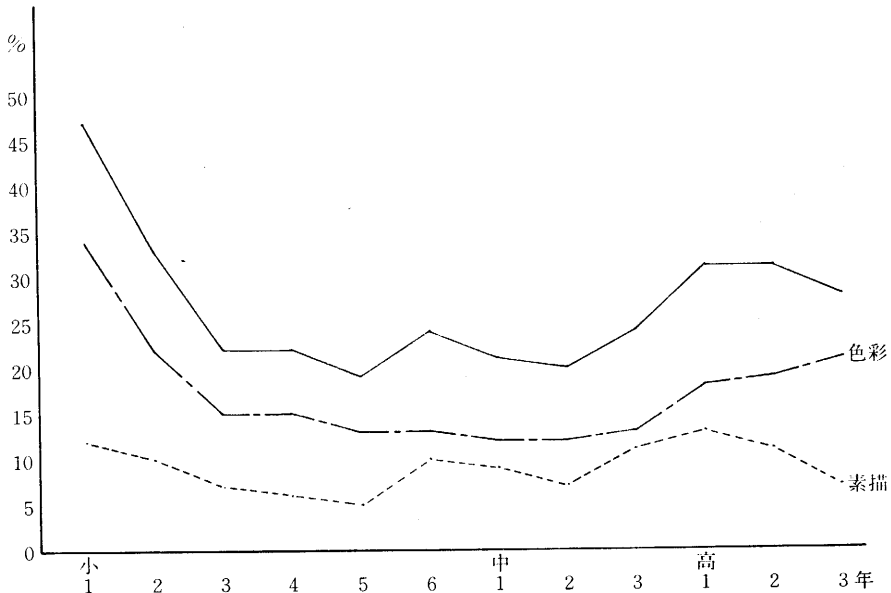


図4 絵画における素描と色彩

(3) 版画における想像と写生との比較 (図5)。

版画を作ることに興味を示した児童生徒が、更にそれを「想像して作る」(想像と略す)ことに興味を示すか、「写生をもとにして作る」(写生と略す)ことに興味を示すか調べた結果である。

内容事項の比較の為にこの事項を設けたが、これを選んだ人数が余りに少ない。ただ、小学校では想像が写生を上回っていたものが、中1・中2を境として逆転する(ただし、高1では同数)。境となる学年に多少のずれはあるものの絵画によく似ている。このことは又、1の(2)に記したことの裏付けともなる。

(4) 版画における単色と多色との比較 (図6)。

(3)に続いて、「単色で作る」(単色と略す)ことに興味を示すか、「多色(2色以上)で作る」(多色と略す)ことに興味を示すか調べた結果である。

先にも述べたように選んだ人数は少ない。しかし、小学校低学年で多色が単色よりも興味を持たれているということは言えよう。この点は絵画と似ている。

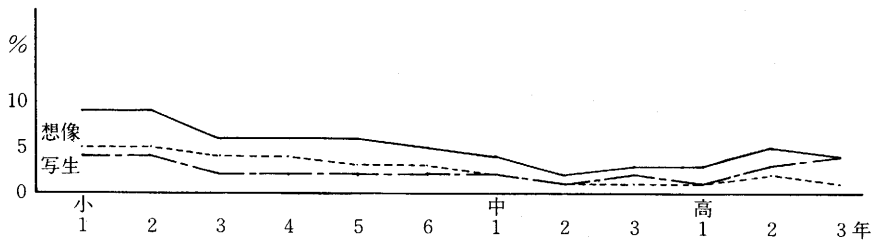


図5 版画における想像と写生

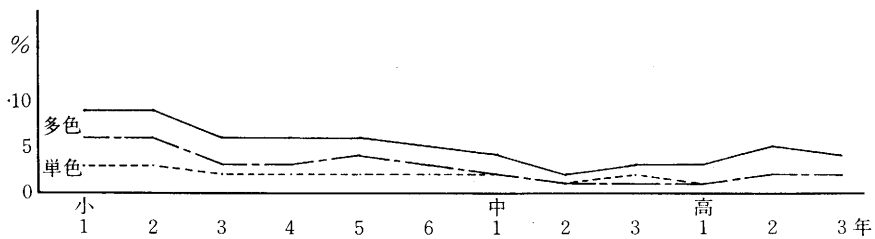


図6 版画における単色と多色

(5) 彫塑における想像と写生との比較 (図7)。

彫塑を作ることに興味を示した児童生徒が、更にそれを「想像して作る」ことに興味を示すか、「写生をもとにして作る」ことに興味を示すか調べた結果である。

中1頃までは想像に対する興味が写生をかなり上回っている。小6では特にその傾向が強い。これは1の(1)で述べたようにこの時期での情緒的発達と関係があると思われる。なお、1の(3)では小4から中2までは絵画のグラフと形がよく似ていることを指摘したが、ここでの想像のグラフが又よく似ている。このことは1の(3)で述べたことを裏付けている。

(6) 彫塑における粘土と木・石彫との比較 (図8)。

(5)に続いて「粘土で作る」(粘土と略す)ことに興味を示すか、「木や石を彫る」(木・石彫と略す)ことに興味を示すか調べた結果である。

小1を除き全学年を通じて木・石彫が粘土を上回り、かつグラフの形が彫塑全体と似ている。一方、粘土は小1を頂点として徐々に低下している。

木・石彫が粘土を上回り、かつグラフの形が彫塑全体(特に小4から中2にかけて)と似ているということは、工作に対する強い興味に示されているような、切る、削るなどの手仕事への意欲も見られる。又、小1の段階で粘土に対する興味が高いのは、幼児期における活発な泥いじりや砂遊びのなごりとも言うべき現象であろう。

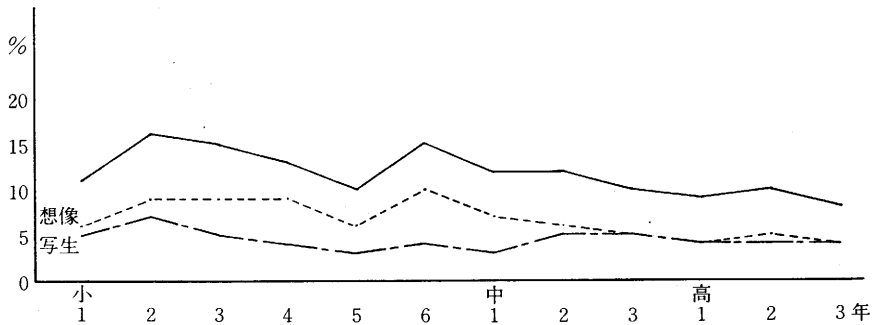


図7 彫塑における想像と写生

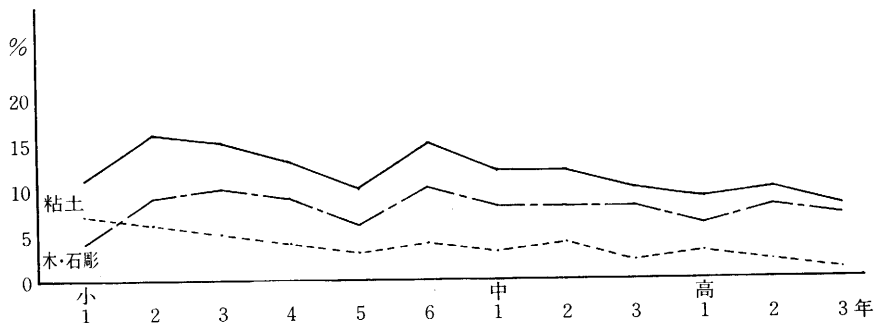


図8 彫塑における粘土と木・石彫

(7) 工作における使うものと模型・遊ぶものとの比較 (図9)。

工作(工芸)をすることに興味を示した児童生徒が、更にその内「使うものを作る」(使うものと略す)ことに興味を示すか、「模型や遊ぶものなどを作る」(模型・遊ぶものと略す)ことに興味を示すか調べた結果である。

使うものより模型・遊ぶものの方がはるかに興味の度合いが高い。小3から小5までは特にその傾向が強い。しかし中3と高1では使うものの方が模型・遊ぶものより高い。

1の(4)でも述べたように「ギャング・エイジ」と呼ばれる小学校中学年を中心に模型・遊ぶものが非常に高いのは当然のことと言えよう。又、中3・高1の段階で使うものが模型・遊ぶものを上回るのは、現実への関心の高まりを示す事実を裏書しているように思われる。(増田)

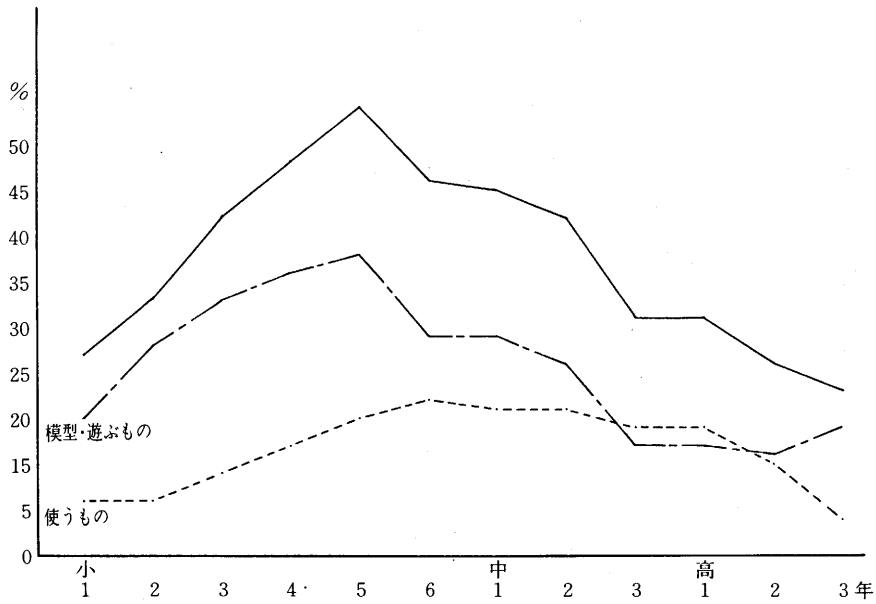


図9 工作における使うものと模型・遊ぶもの

(増田)

Ⅲ. 造形への興味の男女差

1. 領域別にみた男女差

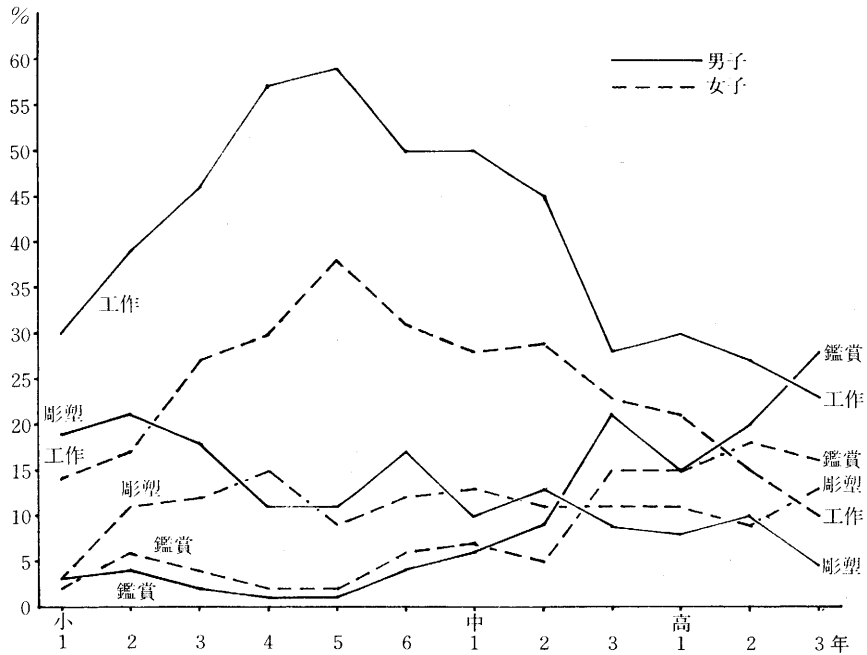


図10 全領域〈工作・彫塑・鑑賞〉

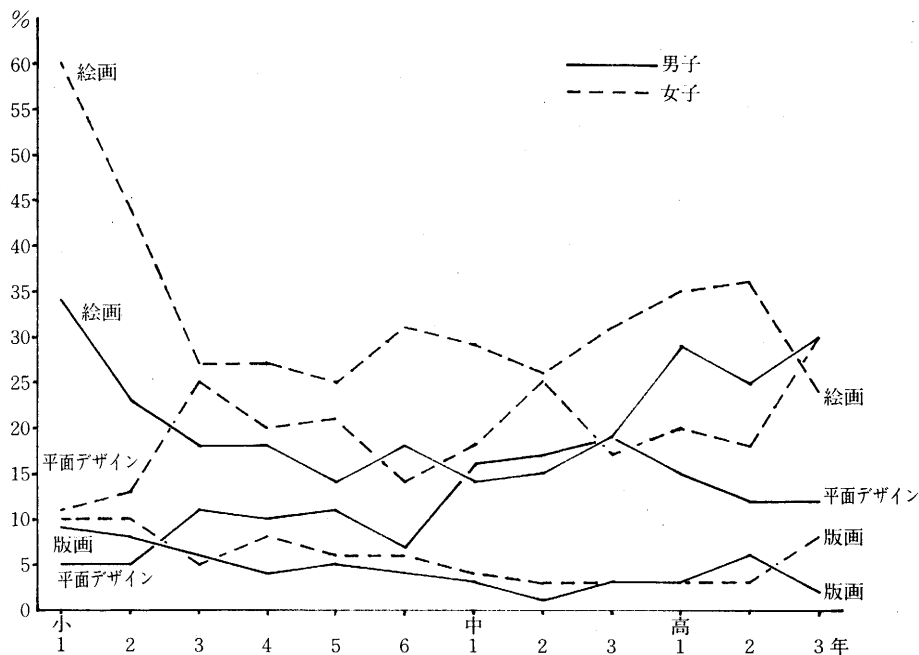


図11 全領域 (絵画・版画・平面设计)

ここに示す図 (図10, 図11) は, Iの方法で調査したものを男女別に折れ線グラフに表わしたものである。グラフは, 調査結果を百分率で表わした数値によって作成されている。これらの図をもとに, 造形への興味の性差について述べることにする。どの領域においても, 男女のグラフは, 大勢で似ているが, 時には, 相反する方向に変化することもある。それらから男女の差を読みとろうと考える。以下各領域別に考察を加えていくことにする。

(1) 絵画 (図10, 図11)。

男女とも高い興味を示していることは, IIの(1)で述べられている通りである。男女のグラフを比較すると, とともに小1が高く, 小3まで下降, 小3から中1までは同じように小5を谷とし, 小6を山としている。しかし, その後, 男子は, 中1を谷としたあと高1まで上昇し, 女は, 中2を谷として, 高2まで上昇する。小6の山は情緒的な発達の表われ, その後のおちこみは, デザイン領域の増加からみて合理主義的理論的傾向が強まった結果 (II-(1)の考察による) と見られる。

全領域についてみると, 男子は工作で常に女子を上まわり, 女子は, 絵画, 平面设计で男子を上まわることが多いことに気づく。このことは, 男子にくらべ, 女子が, 情緒的表現を好むという一般的な予想を裏づけるものである。

(2) 版画 (図10, 図11)。

版画は, 男女共に興味の少ない領域となっている。しかし, このことに関しては, II-(2)で述べられている通り, 絵画との関連を考慮する必要がある。そのうえで, 男女のグラフを比較していくことにする。男子は, そのグラフの姿が絵画とよく似ている。違うのは, 山と谷の位置が少しずれていることである。図1のグラフをみると, 小5までは工作の上昇が激しく, 他

の領域はほとんど下降している。そして、絵画は、版画と一定量を分け合うように、小3以降、一方が上昇すれば、一方が下降し、版画が絵画領域と同傾向の興味にあることを示している。女子は、絵画(女子)と山や谷の位置がほとんど同じである。女子の場合、男子よりも工作に傾斜する度合いが少ないため、絵画と版画が一定量を分けあう形にならず、むしろ心象表現としての同じような傾向を示している。高3で男子は下降し、女子が上昇するについては、高3の資料の少なさから断定はできないが、女子では、版画の装飾的、象徴的効果への関心の高まりと見られないだろうか。一方この時期の男子における情緒的な高まりは、絵画の上昇にみられる。

(3) 彫塑 (図10, 図11)。

彫塑への興味は、小1～小3, 小5, 小6, 中2, 高2で男子が女子を上まわり、女子は小4, 中1, 中3, 高1, 高3で男子を上まわっている。このことから次のような考えられる。すなわち、低年齢では、作業への抵抗が女子を遠ざけているが、次第に関心が高まり、小4以後は心象表現として、男女とも似たような経過をたどるのである。このことは立体的・構造的な工作と似た性格が、はじめ女子には抵抗となり、男子には興味の対象として受けとめられていることを示すものと考えられる。また男女とも、中2から絵画のように上昇せず、むしろ下降気味となり、絵画と同じような折れ点を持ちながら、意外な減少を示すことについては、彫塑表現が児童期を脱してそのまま青年期の表現欲求を満足させるものとなるには、いささか技法的な壁があり、それが、他の心象表現へと興味を移させているのではないかと考えられる。

(4) 工作 (図10, 図11)。

工作には、男女とも、高い興味を示している。しかし、男女を比較すると、どの年齢でも男子は女子の数値を上まわっている。機能的な性格、道具や機械を使った立体的な構造が、男子の関心をひくと考えられる。一方女子の興味も決して低くはないが、男子には遠く及ばない。男子のグラフをみると、小1から小5へと大きな山をつくる。小5がピークである。小6で一段さがり、中1へと横ばいとなるが、これは絵画で述べた発達を裏づける動きである。一方女子は、男子同様、小1から小5へと山をつくり、中1が一段目の谷、中2で小さな山となり、高3へと下降する。以上から工作は、男女とも児童期を特色づける代表的な領域であり、青年期に入ると他の領域が上昇し、工作は下降するという形となっている。男女差についてみると、両者ともその興味の推移はよく似た形をとっている。ただ量的な差が大きいのであるが、このことは、次の領域の中の事項別のグラフによって考察したいと考える。

(5) 平面デザイン (図10, 図11)。

平面デザインへの興味は、低学年で低く、高学年で上昇している。また、おおむね女子が男子をこえている所にこの領域が、特に女子の関心をひくものであることを示す。男女とも、小1が低いのは、平面デザインという領域そのものが、この時期では、絵画と分化していないことを示すと考えられる。しかし、既に小1で女子が男子をこえているという違いは、平面デザインの持つ装飾的な面が、女子に好まれるものと考えられる。男子のグラフをみると、小1, 小2が低い位置でつづき、小3が最初の山、小5までつながり、小6で下降、谷となる。中1は急激な上昇をし、中3が最頂となり、以後高1, 高2と下降する。絵画で述べたことを裏づける動きである。小6で一旦下降するが、その後の上昇は、平面デザインに対する理解と関心の表われと見られ、高1以降の低下は、興味の多様化が影響していることが考えられる。一方

女子も、グラフの変化の形が男子とよく似ている。しかし中3で急降下し高3で急上昇していることが男子とは逆になっているが、成長の速度のずれの表れであろうか。

(6) 鑑賞 (図10, 図11)。

鑑賞は男女とも、グラフに表われた限りでは特に強い興味を持たれているとは言えないが、中学以後急上昇する所に発達と深く関わる姿がみられる。Ⅱ—(6)の考察通り、小6からの上昇は、情緒及び知的発達によると考えられる。男女別にみると、女子は、小1から小2へとやや上昇するが、以後小5まで下降気味の横ばい、小6からやや上昇、中2まで横ばいで、中3で急激に上昇、高1はやや谷となるが高2でさらに上昇する。男子も女子とほとんど同じ変化をみせる。従って、Ⅱ—(6)でも触れている中3での急上昇は、やはり、男女とも、このあたりに発達の節目があることを示すように思われる。又両者のずれがないことも、鑑賞が知的、理論的発達の中で特に学習内容と深く関わる結果ではないかと考えられる。

2. 各領域の事項別にみた男女差。

以下に示す図 (図12~図18) は、各領域内の事項 (技法及び材料別の項目) についての調査を、Ⅲ—1と同様に男女別に折れ線グラフにしたものである。これにより、各領域内の各事項ごとに、男女差について考察を加えることにする。

(1) 絵画における想像と写生の男女差 (図12)。

絵を描くことのうち、想像して描くものと、写生によって描くものの興味を調べたものである。

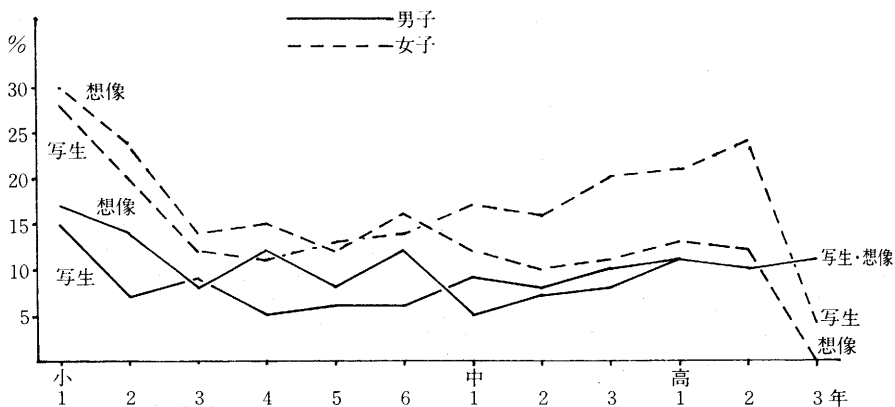


図12 事項別グラフ, 絵画 (想像・写生)

男子は、小1から小6まで (小3をのぞく) 想像が上まわり、中1から高1までは写生、以後は、写生、想像が同数となる。中1から写生がまさるのは、写実的な表現への傾向がでてくるという。これまでの諸研究の結果と一致するものである。一方女子は、想像と写生ともに小3

まで下降、小4、小5は上昇し中1で写生が想像を上まわる。男子同様、写実的傾向の発達を示すと考える。従って、男女ほぼ同じ姿で変化(発達)しているように見えるが、もう少し、細くみると、女子は、既に小5で写生が僅かに上まわり、その後ほぼ同値で中1の変化へとつながっている。従って、小5から写実的な傾向の発達がみられると考えてよい。一方男子は、中1以前は、大きく変動しており想像と差がついている。こうした姿からみた時同様に中1が交替期ではあっても、女子の写実への移行の準備が早く始まっている所に注目したい。もう少し言葉をそえれば、男子より女子の方が早く造形面での発達をしていることからくるものと考ええる。又、以上から、Ⅲ-(1)でみた小6での絵画の上昇は、男子の想像画の上昇による所が大きく、中1、中2、の絵画の上昇は、女子の写生画の上昇による所が大きいことがわかる。従って、同じ心象表現ではあるが小6の山と、中1、中2の山とでは、想像と写生という発達の姿の質的な違いがある。

(2) 絵画における素描と色彩の男女差 (図13)。

(1)同様素描と彩画とにわけてそれぞれの興味を男女別にグラフにしたものである。男子は、小5まで色彩が多いが、小6からやや素描が上まわり高2までつづく。高3では、又色彩が伸びる。一方女子は、色彩が常に素描を圧倒し、高3までつづいている。中学の時期、女子の素描も上昇するが色彩には届かない。こうした動きから2つのことがわかる。ひとつは、絵画の写生が想像にかわることが、児童期から青年期への過渡的な現われとみれば、中学で素描が上昇するのも、うなずけることである。一方、女子の色彩が依然として多いことは、女子の特色を示すと考えられる。女子の絵画表現への関心は、低年齢から大きく、そこに、常に、色彩的なものへの関心があることに注目したい。一方男子について言えば、低年齢で、色彩と想像が多いが、青年期にはいる頃から、素描、写生へと移行する所に女子とは異なる精神的発達の様相を伺わせる。

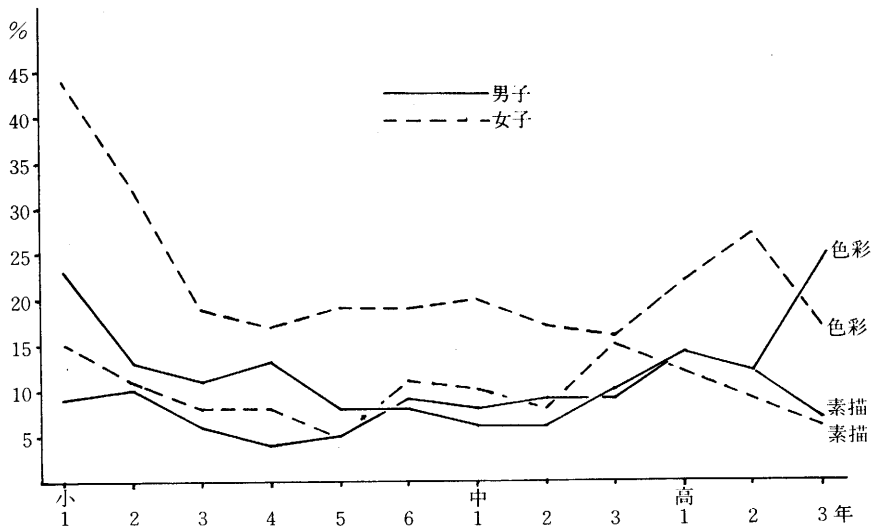


図13 事項別グラフ・絵画〈素描・色彩〉

(3) 版画における想像と写生の男女差 (図14)。

版画を、想像によるものと、写生によるものとの2つに分け、それぞれの興味が男女でどの

ようになっているかを述べる。男子は、中2まで想像が多いが、中3からは、写生が多くなる。絵画同様、想像から写生へという発達の順序を示している。しかし、絵画と比べて、その入れ替りの時期がかなり遅い。そこに版画と絵画の違いがあるとも考えられる。版画の持つ構想を中心とした表現方法が絵画のような写生への転換の時期を遅らせているのかもしれない。一方女子は、交替が中1である。その後、中2、中3では、想像が上まわっているがここは、数値の極端に低い中での差であり、ほぼ同じとみてよい。女子の写生への移行が絵画同様、男子より早いといえる。このことは、Ⅲ-②で述べた、女子の版画が絵画と同じ傾向を持つことを裏づける。

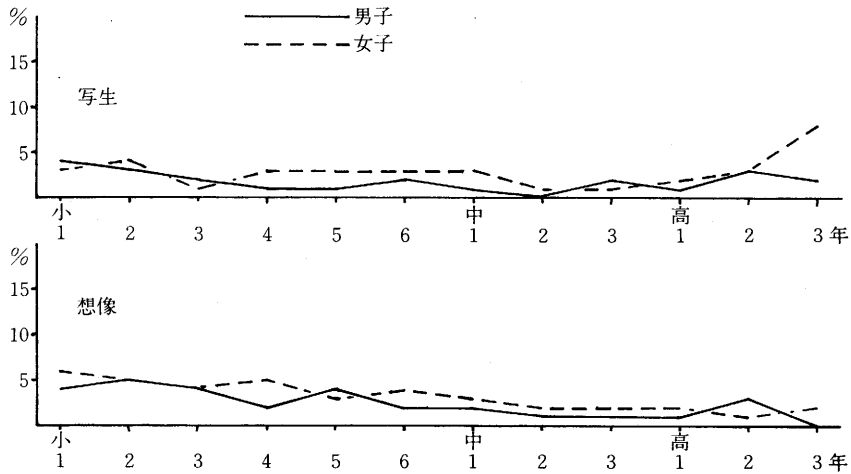


図14 事項別グラフ, 版画 (想像・写生)

(4) 版画における単色と多色の男女差 (図15)

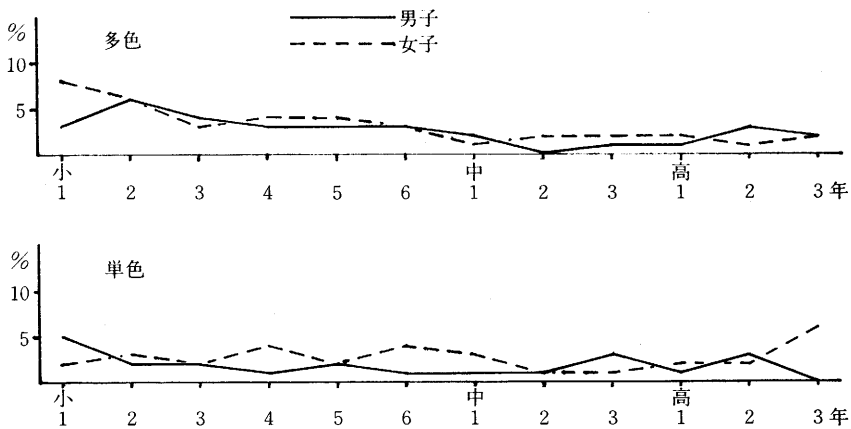


図15 事項別グラフ, 版画 (単色・多色)

版画の技法を単色と多色に分けて、みたものである。これまでの結果から考えれば、女子が

多色を好むのではないかという予想がたつ。これは、絵画における、色彩への関心や、装飾的情緒的傾向からみてのことである。グラフによれば、多色への興味において男子を上まわるのは、小1、小4、小5、中2、中3、の5学年である。小2、小6、高3は同値である。一方男子が女子を上まわるのは、小3、中1、高2の3学年である。予想した程ではないが、一応女子の色彩への興味を感じられる。そして、むしろ、女子のグラフで気づくことは、低年令で多色を好み、高年令では、単色となることである。多版多色は、技術的に高度であるという理由で高学年にあてるのが普通であるが考えてみる必要がある。一方、男子も、高2までは、女子と同傾向であるが、高3での急降下は、資料の少いためか、あるいは、版画への興味が絵画の上昇にとられたかである。

(5) 彫塑における想像と写生の男女差 (図16)。

彫塑を、想像による表現と、写生による表現とに分け、その興味のありかたを考察する。男子は、高1をのぞく全ての年令で想像が写生を上まわっている。一方、女子も、高3をのぞく全ての年令で想像が写生を上まわっている。ここにⅢ-3で述べた彫塑表現の性格がみられる。

絵画では、中学の時期に想像から写生へと興味の傾向が交替するが、彫塑には、それが無い。このことは、写生による彫塑表現が彼らにとってかなり抵抗のあるものであるということを示している。男女としてみられるのは、低学年で写生、想像ともに男子が女子を上まわっていることで、これは、女子にとって、彫塑表現が抵抗のあるものであるという、Ⅲ-3の考察を裏づけていると考えられる。又、写生への転換がないことは、前記写生表現への難しさを背景に、Ⅲ-3の彫塑表現が情緒的な発達の中で減少していくことを裏づけるものと考えられる。

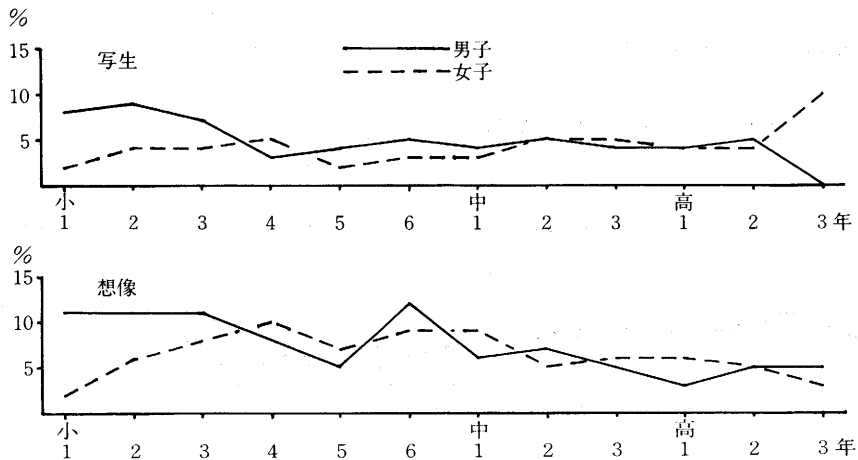


図16 事項別グラフ、彫塑〈想像・写生〉

(6) 彫塑における粘土と木、石彫の男女差 (図17)。

彫塑を材料の上で、粘土材と、木材、石材による彫刻とにわけ、それぞれへの興味の男女差について考察する。ここでも(5)同様、低学年では、材料の別に関りなく、男子が女子を上まわっている。小4以後になると、粘土はやや男子がまさり、木、石材は、女子がまさる。彫塑は工作との関連が深く、木や石が工芸的な領域と近いとすれば、女子の装飾的な関心とのつながりを考えることができる。しかし、グラフによれば、塑像でも、彫刻でも特に男女差は認めら

れないと言ってよいであろう。また、塑像よりも彫刻を好むという傾向は、男女に共通している。これはⅢ-(3)で述べた彫塑的表現への技法の難しさによることを裏書きしているものであろう。そして、こうした傾向を生み出す原因は現在の彫塑教育において、塑像指導に十分な教育環境が与えられていないという理由も大きいと考えられるのである。そのような理由によって、男女差よりも、彫塑表現の興味のありかたが不自然になっていることを感ずるのである。

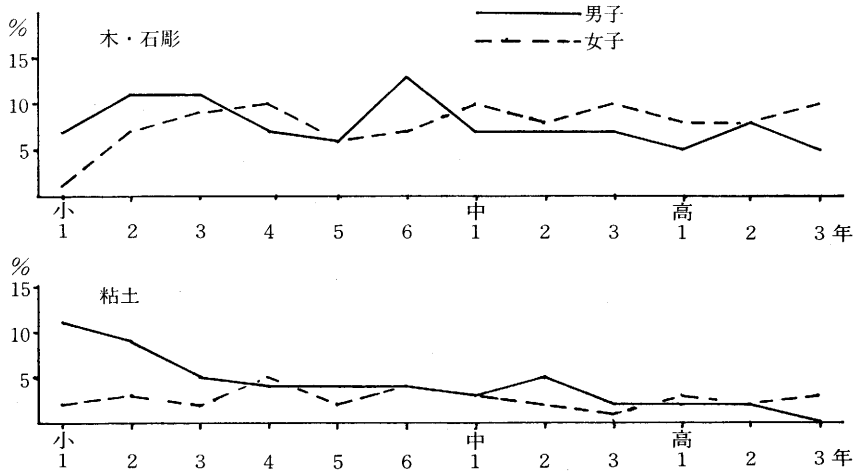


図17 事項別グラフ, 彫塑 (粘土・木・石彫)

(7) 工作における使うものと模型遊具の男女差 (図18)。

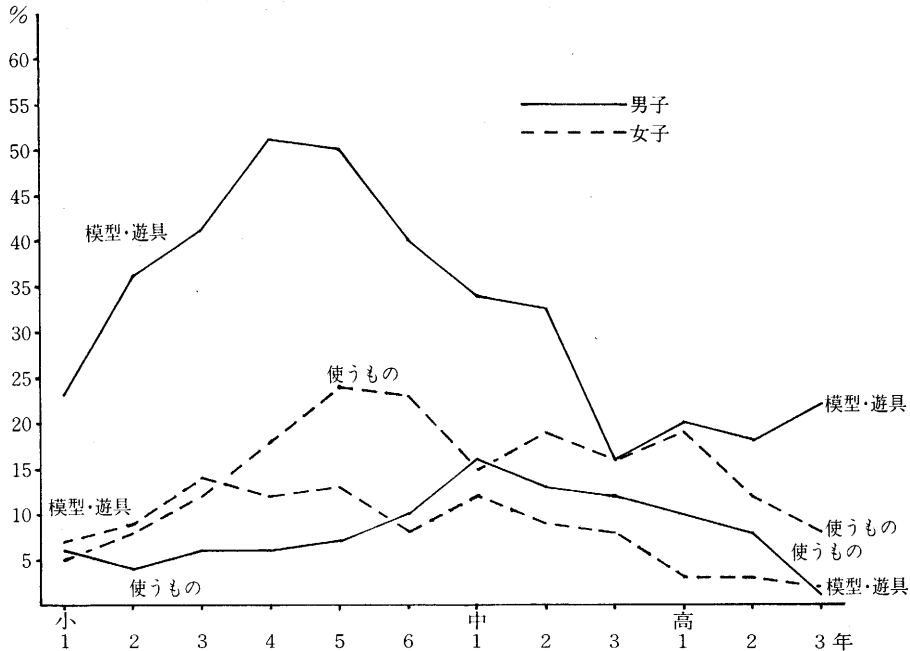


図18 事項別グラフ, 工作 (使うもの・模型, 遊具)

工作を使う目的を持ったものの製作と模型や遊具といった遊びを目的としたものの製作とに分け、その興味の男女差について考察する。工作は、男女ともに強い興味の対象であることは既に述べた通りである。又、男子がどの年令でも女子を上まわる所にこの領域の特色があるといえる。男子において「使うもの」と「模型、遊具」とを比較すると、圧倒的に模型、遊具への興味がまさる。男子の工作は、はっきりと遊び型である。これを年令ごとにみると、小4がピークであり、以後減少し、グラフは大きな山形をなしているが、全体としては、結局、非常に強い興味を示している。女子では「使うもの」が男子の遊具ほどではないにしろ、同じような山形をなしている。女子は、生活型とでもいえるかもしれない。

(水野谷)

Ⅳ. 概 括

1. 調査の信頼性

今回は特に検定はしなかったが、統計的な信頼度については、調査対象の数と地域的な分散などの点から、常識的にかかなりの信頼性があるものとする。しかし何よりもグラフに表れた形そのものが、幾つかの点で調査の信頼性を物語っているように思われる。

例えば絵画領域や工作領域において、男女のグラフの形がほとんど平行線による美しい形を示している点など、それが決して偶然によるものでなく、何らかの強力な理由による必然の結果として表れた形でなければならないことが感じられるなどはその理由である。

2. 結果の概観

(1) グラフに見られる領域別の特色

小学校中学年を頂点とする高い山形をなしているのが工作であり、それと対称的な谷形を作っているのが絵画である。

また小6を起点として俄かに高まるのが鑑賞であり、やや不規則な形ながら似たような傾向を示すのが平面デザインである。

彫塑と版画とは小学校から高等学校までの間に顕著な変化を示していない。

これらのことについて詳しい見解を述べたいが紙数がないので割愛する。

(2) 学年の特色

小学校5年生は成長の過程において、極めて重要な転機を含む学年であるように思われる。男女とも工作に対する興味がとびぬけて強く、グラフでは高い山頂をなしている。そして絵画が逆に谷底になっているのである。このことは彼らの志向が、一概に言えないがとにかく工作的過程に含まれる何かの方向へ向かい、絵画的過程に含まれる何かを圧倒していることを物語っている。ところが6年になると急にその逆の傾向が生起することが示されるのであるが、これらのことは、この年代に関する非常に深い示唆を含んでいるように感じられる。

2年生あたりから各領域の好みが平均的になって来ることなども発達の様相と関連して考えるべき現象であろう。

3. 学校別各領域

グラフの基礎となった、学校別の各領域の数字を挙げておく。

学校別各領域% (素数)

小男

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 2 and 3.

小男

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 5 and 6.

中男

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 2 and 3.

高男

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 2 and 3.

小女

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 2 and 3.

小女

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 5 and 6.

中女

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 2 and 3.

高女

Table with columns for school names, year, drawing, publishing, photography, work, medals, and total counts for domain 2 and 3.

新井, 他: 造形興味調査

4. あとがき

本調査の集計及び結果の考察に当たったのは、新井・増田・水野谷の3名であり、報告の執筆はⅠ、Ⅳを新井、Ⅱを増田、Ⅲを水野谷が担当した。なお予備調査の調査書作成の段階で附属小金井小学校教諭（当時）藤島清雄、同高浦浩両氏の協力を得た。

本調査に快く協力して下さった各校の校長先生、図工、美術担当の先生方、学級担任の先生方に対し、厚く感謝の意を表して報告を終る。

A Study on Children's Interest in the Areas of Art Activities

Shuichiro ARAI, Kingo MASUDA, and Norio MIZUNOYA

Department of Fine Arts Education

Summary

This is a study of children's interest in art in the school curriculum from elementary to high levels.

It has been thought that their interest in art activities decreases while they are high graders of elementary school and junior high school students.

But, as the result of the study, we regard it not as the decrease in the interest but as the change in the direction of the interest.

We investigated 8,795 pupils (8,754 boys and 4,212 girls) from the viewpoints of "the change by development" and "the difference between boys and girls" and examined the results with the aid of the graphs.

